Mini Interview

本尊のある生活❶

本尊は私にとっての原動力

井野優介さん（真宗大谷派僧侶）

1996年愛知県生まれ。2022年、同朋大学大学院博士前期課程（仏教文化専攻）修了。真宗大谷派岡崎教区第13組明榮寺衆徒。現在、豊田大谷高校特別非常勤講師。

本尊とともに

――井野さんの真宗との出会いを教えてください。

父方の曾祖父が熱心な門徒だったんです。毎朝夕お内仏の前でお勤めをしていましたから、私も3歳の頃にはとなりに座り、5歳くらいになると「正信偈」を口ずさむようになりました。また、曾祖父はお手次のお寺に法座のたびによくお参りしていたので、そこへ私も連れて行かれるわけです。すると、お寺に来られていたおじいさんおばあさんがかわいがってくださったり（笑）。

その曾祖父は生前、病室に三折本尊を安置し、「大きな声で「正信偈」をお勤めしていたら、看護師に怒られた」と話していたことがありました。当時、小学3年生の私には曾祖父がなぜそこまでご本尊を大切にするのかわかりませんでした。その思いとは何なのだろうという当時抱いた問いが、今の私を歩ませているんだと思います。

――井野さんはご自宅のアパートを「芳観房」と名づけて、報恩講などを勤められています。どんな思いで本尊に向き合っておられるのでしょうか？

「芳観」というのは曾祖父の法名です。自分の聞法の原点として名のっておきたいと思い、命名しました。かつて宗務総長を務められた暁烏敏師のご一門には、林暁宇先生や谷田暁峯先生など、ご自宅を「具足舎」、「広大舎」と名づけ、聞法の道場として公開されてきた方々がいます。その方々の教えにふれたとき、衝撃を受けたのです。7人入るとぎゅうぎゅうになるような小さな集まりですが、自宅を道場として報恩講などを勤めて今年で8年目になります。コロナ下になってからはオンラインで配信もしており、多いときには30名ほどの方がご一緒くださいました。

ご本尊は私にとっての原動力です。自分をいきいきと活かす力。いろんな受けとめがあると思いますが、私は力という言葉であらわしたいです。当然モノの形をとっていますが、単なるモノではない。人間を超えたはたらきが自分を安心して歩ませてくださる。ご本尊は私にとってそんな存在です。

＊俗名とは別の、仏弟子としての名。